

アレクサンドリア断章

野 町 啓

これから物語ろうとするのは、古代都市としての「アレクサンドリア」であり、しかもエジプトの「アレクサンドリア」である。今日「アレクサンドリア」と言えば、カイロに次ぐエジプト第二の都市「アレクサンドリア」しかありえず、ことさら「エジプト」と限定する必要などないのではないかと思われるかもしれない。しかし、手近な地名事典を引いてみると、現在「アレクサンドリア」という名称を持つ都市は、アメリカ南部、ルーマニア南部にも存在する。さらにギリシア東部には「アレクサンドルポリス」があり、またトルコ南部の地中海最東端に位置する都市「イスケンデルン」は「アレクサンドレッタ」とも呼ばれ、さらにタジキスタン共和国北西部の都市「レーニナバート」は、「アレクサンドリア・エスカテ」という古称を持っていたことがわかる。そして「アレクサンドルポリス」、「アレクサンドレッタ」、「アレクサンドリア・エスカテ」は、それぞれ「アレクサンドリア市」、「小アレクサンドリア」、「最果てのアレクサンドリア」を意味するギリシア語である。こうした諸都市の名称が、ギリシア北東部マケドニアにあった古代王国の支配者アレクサンドロス大王（アレクサンドロス三世「在位前三三六―三二三」）の名に直接由来するか、もしくはその名にあやかっ

てつけられたであろうことは直ちに推測できよう。

教科書風に言えば、アレクサンドロスは紀元前三三四年春、当時ダレイオス三世（在位前三三六―

三三〇）の君臨していたアカイメネス朝ペルシアを打倒する目的から、ヘレスポントス（ダーダネルス海峡）を渡って小アジア地方（現在のトルコ領の一部）へと進軍し、まずマルモラ海に注ぐグラニコス河畔で最初の戦鬪を勝ち取る。次いで前三三二年秋にはイッソスでダレイオス本人と会戦し、二度目の勝利を収め、さらに彼はエイリアへと南下し、東地中海にあったペルシア艦隊の拠点を次々に制圧、同年の冬にはペルシアの支配下にあったエジプトを手中に収める。そして翌前三三一年夏、テイギリス河上流のガウガメラの戦いでペルシア軍に壊滅的打撃を与え、現在のイラク中部のバビロン（後に彼はこの地で病没することになるのだが）を経てペルシア本国へ進攻し、イラン中南部にあったペルシアの首都ペルセポリスを焼き、対ペルシア戦争に終止符を打ったのであった。

しかしその後、彼はさらに軍を北は現在のタジキスタン共和国、南はインドの西北部インダス河の五大支流の一つビアース河（古名ヒスパシス河）まで進めていくことになる。そしてこの大遠征の途中で軍事基地の意味から、次々と自分の名を冠した都市を新たに建設していき、その数は七〇余にのぼると言われる（ただし現在資料上確認できるのは三四）。先の「アレクサンドリア・エスカテ」は彼の版図の北限を示し、エジプトのアレクサンドリア（以下煩を避けるため「アレクサンドリア」とのみ記すことにする）も、エジプトを征服した際、前三三一年一月起工された新都市であって、その版図の西の境界を示していることになる。また「アレクサンドレッタ」は、最初にペルシア軍と対したイッソスの近郊にあり、その先勝を記念して建てられた新都市だと言えよう。

アレクサンドロスは、インド遠征中、軍隊の反乱にあい、イラン西南部、ペルシア帝国の冬の王宮のあったスーサへと帰還する。彼はなかなかの酒豪としてもきこえており、スーサでは、水で割って飲むのが古代の風習であったのに生のワインを飲む大宴会と、マケドニア人とペルシア人を融合し、一大支配民族を作ろうという目論見から、部下たちとペルシア人の娘との大結婚式を前三二四年に催

し、彼自身もかつての宿敵ダレイオスの娘スタティラを妻に迎える。だがその翌年六月、バビロンで、長期間にわたった酒宴の後高熱を發し亡くなったという。もつとも彼の死には諸説があり、一説によると毒殺であつて、それには、後にふれるように彼自身の若い頃の師であり、アレクサンドリアに展開する學問研究活動に深い影響を及ぼした哲學者アリストテレスがその調査に一役買つていたとも言われている。

ところで、古代においては、歴史の父と言われるヘロドトス以来（『歴史』第二卷四二節）、世界をヨーロッパとアジアとリビア（ニアフリカ）に三分するのが通例であつた。後にアレクサンドリアの圖書館長職を務め、夏至の日にアレクサンドリアの地面に杖を立て、その影の長さを基に地球の円周を計算した人として知られるエラトステネス（前二七五—一九四）の考察に基づく世界地圖が伝存されているが、やはりそのような区分がなされている。こうした地理的通念からすれば、アレクサンドロスの版図は、全世界に及ぶものと言えよう。事實ガウガメラにおける対ダレイオス戰の決定的勝利以後、前三三〇年頃のものとして推定されるロドス島で發見されたある史料には、彼に対し「アジアの王」という称号が用いられている。

彼の生涯を記したものは、ローマ帝制期から紀元後五世紀頃までに六〇近い數に及ぶと言われる。その中にある所伝によれば、アレクサンドリアの起工に先だつて、彼は、當時ギリシアのデルフォイ、ドドナと並ぶ有名な信託所のあつたシーワのアンモン神殿を訪れたという。シーワはリビア砂漠の北辺、エジプトの北西部に位置するオアシスであるが、そこにはギリシア人がゼウスと同一視したアンモン神を祀る神殿があり、ギリシアにとどまらず古代世界の諸王は、有事に際し決断を下すにあつてそこに使者を派遣し、神託を伺うのが常であつた。また王のみならず、ペルセウス、ヘラクレスといった英雄も偉業をなすにあつてこの地を訪れたという伝承もある。アレクサンドロスの属するマケ

ドニア王朝は、「アルゲアダイ」と称されるが、それは王朝の祖先がギリシア本土のアルゴス出身のアルガイオスに遡及されるとする古伝説に基づく。そして彼は、この父方の血統を介してヘラクレスの後裔を自認しており、そのひそみに倣つてこの地を自ら訪れたと言えよう。そしてそこで神官を通して、「ゼウスの子」であり、「全世界の支配者」だという託宣を下されたというのである。いわば彼は、この神託により、ヘラクレスと同じく自らがゼウスの血を引く半神（Ⅱヘロス、英雄）であることのお墨付を得たことになる。そしてこの所伝に従えば、この神託を受けた後、彼はアレクサンドリアに赴き、その創建にとりかかったことになる。だが彼の伝記は、この点について、必ずしも一致した記述をなしているわけではない。

一般に広く知られている彼の伝記としては、例えばプルタルコス（前四六頃—一二〇頃）の「アレクサンドロス伝」が挙げられよう。プルタルコスはギリシアとローマの似通った人物を対にして、いわゆる『プルタークの英雄伝』をものしており、その中でアレクサンドロスは、後にアレクサンドリア図書館の焼失事件の張本人とされる「カエサル」と一組にされている。ちなみにプルタルコスは、アレクサンドロスの父フィリッポス二世が、前三三八年アテナイ、テバイを主とするギリシア連合軍を破り、ギリシアに対する支配権を確立した古戦場、ギリシア中部ボイオティアのカイロネイア出身であり、デルフォイの神官でもあった人物である。そして彼の「アレクサンドロス伝」に記されている行程は先のものとは異なっている。つまり彼の叙述に従えば、エジプトに進軍した彼は、まず古王朝以来の首都であるメンフィスに入り、次いでアレクサンドリアを設計し、着工を命じた後、アンモン神殿へ赴いたとされ、先述の場合とは逆の行程がとられているのである。

では、どうしてこうした矛盾が生じて来るのか。一体どちらの記述が、史実を反映しているのだろうか。この問題は、アレクサンドロス研究者の間で解釈上様々な論争のあるところである。彼の伝

記が古代においてかなりの数にのぼることはすでにふれたが、その主要なものは、ブルタルコスも含めて、彼の死後から三〇〇年を経過したローマ帝制期に集中している。つまり同時代的資料を欠いているのである。中でも信頼性があるとされているものに、紀元後二世紀のアリアノスの『アレクサンドロスの東方遠征』（『アナバシス』）がある。アリアノスはローマ元老院議員であり、ストアの哲学者エピクテトスの門下でもあつて、師の『語録』を残してもいる。彼は、『アナバシス』の劈頭で、自分のアレクサンドロス伝がアレクサンドロスの遠征に従事した將軍プロトレマイオス一世（この人物はアレクサンドリアと深い関わりを持つことになる）や從軍技師アリストブロスの直接的な記録と両者の厳密な比較考証に基づくものであることを強調している。しかし、彼が依拠したとするプロトレマイオスなりアリストブロスの史書は散逸しており、例えばプロトレマイオスがどのような記述をしたかを、われわれは約五〇〇年後のアリアノスの著書から再構成するほかない。またブルタルコスには、アレクサンドロス直屬の官選史家（太史）でありかつアリストテレスの甥であるカリステネスの証言もしくは引用がみられるが、これについても先のアリアノスの場合と同様のことが言える。そしてこれらの諸伝の内容には、重要な事件に関し不一致や齟齬がみられ、「古代都市」アレクサンドリアが謎であるばかりか、アレクサンドロスの生涯すらも謎に包まれたものと言つて過言ではない。

ここではこの問題に深入りすることを避け、シーワからアレクサンドリアへの行程にふれた人物が、前三世紀アレクサンドリア出身のクレイタルコスであり、さらに現存しない彼のアレクサンドロス伝の内容を伝えているのが、前一世紀ローマ共和政末期のシシリ島出身のディオドロスであることに注目しておきたい。実は、クレイタルコスの出身地は長い間不明であつた。だが前七九年、ベスヴィオス火山の大噴火で埋没したイタリア南部の都市ポンペイ近くのヘルクラネウム（現在のエルコラーノ）にあつた貴族の別荘が一八世紀後半に発掘され、大量のパピルス文書が発見された。その中の一

つに、エピクロス派の当時の哲学者フィロデモスの著書があり、そこに「アレクサンドリアの市民クレイタルコス」という記録が残されていたことから、はからずも彼の出身地がわかることになったのである。クレイタルコスには、先のような行程をアレクサンドロスにとらせ、出身地アレクサンドリアの創設者を神格化し、都市の成立縁起を權威づける意図があつたのであろう。

また伝承者ディオドロスは、後にアレクサンドリアに滞在し、トロイア戦争から前六六年までの世界史『ビブリオテーケー』（全四〇巻、うち完全に伝存しているのは一五巻）を著す。クレイタルコスのアレクサンドロス伝もその中に伝承され、先にふれた英雄の神格化の問題もこの著書で紹介されている。彼はこの著書をもつるにあつて、実地の見聞とアレクサンドリアの王朝所蔵文書を基にしたと記している。彼の書名『ビブリオテーケー』自体、直接には「図書館」（「ビブロス」「書物」を架蔵する場所）を意味するものであり、謎に包まれたアレクサンドリアの図書館の存否を確認する意味から注目しておく必要がある。しかも彼は、この著書の中で、ゼウスをはじめとするオリュンポスの神々は、もともと人間であり、その偉業により後に神格化されたとする、前三世紀初頭のメッセネ出身のエウヘメロスなる人物の説を紹介している。これは、彼自身の観点でもあるが、当時の流行思想であつて、ヘレニズム時代の思想上の特色を解くキー・コンセプトの一つなのである。この発想は、クレイタルコスによる人間アレクサンドロスの神格化の経緯と軌を一にするものであり、伝承者がディオドロスであることは注目しておいてよい。

ともかく、こうした発掘や解読、後代の文献から原史料へと遡及し、再構成するといった作業は、アレクサンドリアで展開する「文献学」の真髄である。だが、文献学の問題は後に立ち入ることにして、ディオドロスの歴史記述の発端には「トロイア戦争」がおかれているが、ホメロスの語るトロイア戦争の物語やそこでの英雄たちの活動を、今日われわれが知ることができるのは、実はこの文献学

のおかげなのである。いやむしろ、ホメロスを作者と称する様々なトロイア戦争の物語があつたからこそ、アレクサンドリアに文献学が開花したとさえ言つてよい。そして、アレクサンドロスとアレクサンドリアとの関わりはこの問題を抜きにして語ることはできない。

先のプルタルコスによると、アレクサンドロスは、単に酒好きの英雄というにとどまらず、大変な読書家であり、とりわけホメロスの『イリアス』を愛好し、学問上の師アリストテレスによる校訂本を、宿敵ダレイオスが所持していたという豪華な小箱（「ナルテークスの小箱」と呼ばれる茴香の一種から作られた貴重品保存用の小箱）に入れ、枕頭の書としていたという。では、なぜ彼がホメロス、ことに『イリアス』を愛読したのであるうか。これに答えるためにも、また『イリアス』と彼、ひいてはアレクサンドリアとの関わりを述べるためにも、まず物語の背景となつてゐる「トロイア戦争」についてふれておかなければならない。

トロイア戦争は、簡単に言つてしまえば、ギリシアかつての美女、ペロポネソス半島南部のラケダイモン（スパルタ）の王メネラオスの妃ヘレネが、エーゲ海をはさんで対岸にある小アジアのトロイア（別名イリオン。なお『イリアス』とは「イリオンにまつわる物語」を意味する）の王子パリスに連れ去られたことに端を発する。しかもこのパリスは、アレクサンドロスとも呼ばれ、当面の主題となつてゐるアレクサンドロスと同名なのである。古代にあつては、同名の人物が多数存在することは別に珍しい現象ではない。例えば、紀元後三世紀頃ディオゲネス・ラエルティオスにより著された『ギリシア哲学者の生涯と教説』という、タレスから始まつてエピクロスに至る著明な思想家ごとに一章ずつをあてた書物がある。この本では、各章の末尾を「ところでプラトンという名の人間はほかにもこれこれしかじかの人々がいた」という記述で縮めてゐる。したがって同名の場合、出身地や属

する学派を名前につけて区別することになる。アレクサンドロス自身についても、「大王」（メガス）という称号をつけたり、「三世」を付すことが示すように、彼の家系にはアレクサンドロス一世、二世という同名の王がすでにいたことを示している。だが、アレクサンドロスとも呼ばれるパリスとアレクサンドロス大王とは、アレクサンドリアの建設に関し、伝説上とはいえ、浅からぬ因縁で結ばれている。そしてこの点を明らかにするには、なぜパリスがヘレネをトロイアへと連れ去ったのかを述べておかねばならない。

トロイア戦争のそもそもの発端は、オリンポスの最高神ゼウスの意志へと遡る。つまり、ある時大地を裁量する女神ガイアが、人間たちに敬神の念が薄らぎ、しかも人口がふえてその重さに耐えられなくなったとゼウスに訴えた。いつの場合でも、人間の数を減少さす最も有効な手段は戦争である。ゼウスの場合も例外ではなく、ひとつ戦争を引き起こそうと考え、次のように事を運んだのである。海神ポセイドンと人間ペレウスの結婚式——ちなみにこの両者の子がアキレウスであり、彼は神と人間の子、つまり半神ヘロス（英雄）ということになる——の宴席に諸神は招かれたのに、わざと不和・争いを裁量する女神エリスだけは除かれるように謀った。そこでそれを恨んだエリスは、「一番美しい女神に」と書かれた黄金の林檎を宴席に投げ入れたため、ゼウスの妻ヘラとアテナ、アフロディテの三女神の間で、誰が最も美しいかをめぐって争いが生じ、ゼウスの命令でパリスの審判を仰ぐことになる。パリスはトロイアの王プリアモスとその妃ヘカベの末子であったが、誕生の時、生かしておくと王家に禍いをもたらすという予言があり、トルコ西部古代フリュギアのイデ山（ガズ山）の麓に捨てられていたのである。そこでパリスに対し、三女神は、それぞれ、自分を一番美しいと判定してくれるなら、ヘラは世界の支配権、アテナは戦争における常勝、アフロディテは美女をあたえることを約束するが、結局パリスはアフロディテに裁定を下すのである。そしていわばその見返りとして、

先にふれたラケダイモンの王メネラオスの妃ヘレネを奪い、故国へと帰還するのである。そしてこのヘレネを取り戻すため、メネラオスの兄、当時ペロポネソス半島北部アルゴス地方（ミューケナイ）を支配していたアガメムノンを総大将として、ギリシア軍が小アジアの北西部、現在のトルコ領にあるトロイアへと進攻するのがいわゆるトロイア戦争であり、ホメロスの大叙事詩『イリアス』の背景にほかならない。

ここで敢えて「背景」と言ったのは、古代アレクサンドリア文献学の成果として、現在われわれが手にしている『イリアス』全二四巻、一五、六九三行には、戦争の発端についての叙述はない。その最終巻にほんの数行「パリスの審判」についてふれられているにすぎないのである。そこで展開されているのは、トロイア戦争一〇年目の数十日間、ギリシア方随一の英雄アキレウスと総大将アガメムノンとの戦利品として捕らえられた女性をめぐる確執、親友パトロクロスがトロイア方の総大将、パリスの長兄ヘクトルに討たれたことへのアキレウスの怒りと復讐の物語なのである。トロイア戦争をめぐるのは、現存の書物の形で残されている『イリアス』の他にも、いくつかの物語が「ホメリダイ」（ホメロスの後裔）と称する吟遊詩人たちにより口誦され、口承されてきた。そのほとんどは散逸してしまっただが、戦争のこうした発端をテーマとしたものに『キュプリア叙事詩』のあったことが、ヘロドトスにより伝えられている。この『キュプリア叙事詩』自体も伝存しないが、ネオプラトニズムの主要な思想家の一人である紀元後五世紀のプロクロスのある著書にその梗概が記されたことから、われわれは上述のような経緯を知ることができる。しかもこの場合、より正確に言うと、プロクロスのこの本自体も現存していない。だが、アレクサンドリアの文献学研究の精神を継承に立脚する、後にギリシア研究の中心地となるコンスタンティノープルの学者、九世紀のフォティオスの先のディオドロスと同名の図書館を意味する『ビブリオテーケー』の一節に、プロクロスの著書の内容が伝存さ

れており、こうした二重の経路を辿つて、トロイア戦争の発端について、どのような物語がなされたかをわれわれは知ることができるのである。

トロイア戦争は、ギリシア方の勝利に終わるが、アレクサンドロスとアレクサンドリアは、この主要人物アキレウスならびにパリスと伝説上深い関わりを持つ。パリスの兄、トロイア方の総大将ヘクトルの妻アンドロマケは、敗戦後捕らえられ、アキレウスの子ネオプトレモスの妻となり、エピロスに赴く。そしてエピロスは、実はアレクサンドロスの母オリンピアスの出身地である。彼は、この母方の血筋がアンドロマケと関わり、それを介してアキレウスの後裔を自認し、それを手本としていた。実際ヘレスポントスを渡り小アジアの地に大遠征の第一歩をしるした際、彼はまずトロイアに赴きアキレウスの墓標に油を塗り花輪を捧げ、「アキレウスは生きている間は真実の友パトロクロスを持ち、死後はその生涯についての偉大な報告者ホメロスを得た果報者だ」と言つたという。このようにトロイア戦争のギリシア方英雄に戦勝の加護を祈るのは、いわば慣例となり、カエサルもポンペイウスを追つてエジプトへと進攻する際、やはりトロイア地方のエーゲ海に面したシゲイオン岬——かつてここはギリシア方の基地であつた——を訪れ、そこにあつたアキレウスの墓に祈りを捧げたと伝えられている。

アレクサンドロスの場合、自分をアキレウスに擬したのは、トロイア戦争をギリシア側からする非ギリシア人、つまり夷狄（バルバロス）であり、ペルシアに対する彼の戦いもそれと同巧のものだと思ひなしていたことを示唆している。プラトンは、理想国のあり方を論じた『国家』第五巻において、「バルバロス」こそギリシア人にとつての敵であつて、戦争とは本来彼らに対してなされるべきものだという主張をしている。アレクサンドロスの出身地マケドニアは、すでにアレクサンドロス一世（前四八五—四四〇頃）の頃、オリンピアの競技に参加を許されていた。このことはマケドニアがギ

リシアの一部であることをギリシア民族の側によりすでに承認されていたことを意味する。それに彼の師アリストテレスも『政治学』第七巻の中で、寒いヨーロッパと暑いアジアの中間にギリシアを位置づけ、前者がその氣候のせいで氣概には富むが思慮に欠け、逆に後者は氣概に欠けるが思慮深いと言ひ、ギリシア人は双方の長所を有する民族であつて、こうした風土決定論を基にギリシア民族の支配による世界統一の可能性を述べている。アレクサンドロスは、一面において、スーサの集團結婚式にみられるように、諸民族の融合を考えながらも、その反面、師からこうしたギリシア（ヘラス）中心主義的思想を教示され、影響を受けていたことは想像にかたくない。

アレクサンドリアとトロイア戦争とのゆかりは、勝利を得たギリシア方の故国への帰還の物語と関わってくる。帰還の物語といへば、ホメロスのいま一つの叙事詩『オデュッセイア』の主人公、ギリシア方の知将オデュッセウスが想起されるが、ここで話題の中心となるのは、パリスとメネラオスである。メネラオスは、ある伝承によると、取り返した妻ヘレネと共にギリシア本土へ帰る途中、エジプトに立ち寄つた。それは、ナイル河口の砂地の小島ファロス島を住処とする、海神ポセイドンの従者、「海の老人」と言われるプロテウスに、安全な道順を聞くためであつた。プロテウスは、やはり海神であり、変幻自在の力を持ち、すべての海の深さを知っていたからだと言われる。

しかしこれには、プロテウスをエジプトの王とする次のような別の所伝がある。パリスがヘレネを奪つて、トロイアへと船出した際、烈風に襲われ、ファロス島の近くに漂着した。ところが人妻を奪うという不埒な所行に怒つたプロテウスは、パリスからヘレネを奪ひ、ファロス島にとどめておいたというのである。そしてこの話を材料に、後にギリシアの三大悲劇詩人の一人エウリピデスは『ヘレネ』を著すことになる。つまり、パリスはプロテウスからヘレネに生き写しの像、いわば「幻のヘレネ」を渡され、本物のヘレネは夫メネラオスがトロイアからの帰路連れて帰ってくるのを待つてい

たというのである。ちなみにエウリピデスは、アレクサンドロスの愛好する作家であり、また晩年彼の祖先、アルケラオス一世（四一三—三九九）によりマケドニア西部の首都ペラの宮殿に招聘され、そこで『バッコス of 信女』を著し、その地で亡くなった。アルケラオス一世は開明君主であつて、アテナイの文化を積極的にマケドニアに導入しようとし、アリストテレスによるとソクラテスをその宮殿に招聘しようとしたこともあるという。

だがアレクサンドロスとアレクサンドリア、特に都市の建設縁起との関わりで言えば、プロテウスの住処とされるファロス島に注目しておかなければならない。プルタルコスによると、アレクサンドロスは、エジプトを征服した際、新都市の建設を思い立ったが、場所の選定に迷つていた。ところがある晩、白髪の老人が夢枕にたち、「さて波の逆巻く海の中に一つの島があつて、エジプトのちょうど前にあたり、人々はそれをファロスと呼んでいる」というホメロスの『オデュッセイア』の一句を吟じたという。これをヒントにして、彼はファロス島に行き、その地が都市を建設するのに格好の場所であると判断して、マレオティス湖（マリユート湖）とこの島との間にアレクサンドリアの建設を命じたのである。こうしてみると、二人のアレクサンドロスが、ホメロスの描く世界の中で奇妙に連なつてくるのである。

しかし、アレクサンドロスが、実際どのような目的からこの地を選定し、どのような都市の建設を命じたのかは、不明である。紀元後一世紀の建築家ウィトルウィウスの『建築書』第二巻の序文に、奇抜な容姿と都市構想でアレクサンドロスに気に入られたマケドニア出身の建築家ディノクラテスにこの都市の設計が委ねられ、彼は、エジプトの穀倉としての意義やこの地がナイル河口に近いことから、商業都市として建設に着手したという話が伝えられているが、真偽のほどは定かではない。

アレクサンドロスの版図が全世界に及び、一大帝国を成していることから、われわれはアレクサン

ドリアをこの大帝国の首都と考えたくなる。しかし、先にふれたようにアレクサンドリア建設とゼウス・アンモン神参拝という重要な事件の前後関係については、彼の伝記作家の間に、矛盾がみられるにもかかわらず、いわばすべての彼にかかわる伝記に一致した事柄が一つある。それは、アレクサンドロスが生涯において二度とアレクサンドリアを訪れることはなかったということである。アレクサンドリアが都市として繁栄をみせるのは、彼の配下の將軍の一人、若い頃共にアリストテレスの下で学んだプトレマイオス（一世ソテール）を開祖とする王朝の首都としてである。そして、数あるアレクサンドリアの中で、エジプトのアレクサンドリアが盛名をかせ、後代に影響力を持つのは、プトレマイオス王朝の首都であったからだと言つてよい。

アレクサンドロスは、生前、誰を後継者とするかと尋ねられた際、一番の強者に譲るが、たぶん自分の死後、麾下の將軍たちの間でその地位をめぐつて争いが生ずるであらう、と言つたと伝えられる。彼の死後、その予想通りに熾烈な戦争が展開されることになるが、この間の経緯を伝える重要な史料が、実はディオドロスの先の『ビブリオテーケー』なのである。

プトレマイオス一世は、ライバルたちが相互の争いによつて姿を消していくことで、漁夫の利を占めていく。その間、まず彼はエジプトを領有する。そして自己の地歩を固めるため、葬儀官を買収するなどの策を弄し、アレクサンドロスの遺体を、死の翌年の前三三二年——この年は奇しくもアリストテレスの没年でもある——、バビロンからメンフィスを経て、アレクサンドリアに持つて来るという離れ技をやつてのける。それはマケドニアの風習によると先王を埋葬することが、後継王となるための要件だったからだと言われる。そして、遺骸を黄金の棺に入れた靈廟を作つたとされる。こうしておいて、彼は、前三二〇／三一九年、首都を、古王朝のファラオ以来のメンフィスからアレクサンドリアに移し、前三〇五年には王号を僭称するに至るのである。もつともこの廟は、約二百年後、前

二四年頃この地を訪れ、四年間ほどここに滞在した、ストラボン（前六三―後一九）の『地誌』によると、後に彼の後継者プトレマイオス十世により売り飛ばされ、代わりにアラバスター（雪花石膏）の棺になっていたという。ちなみにこのストラボンは、アルメニアからイタリアのサルディニア、黒海からアフリカの北東部エチオピアに至る各地を巡歴した人物であり、アレクサンドリアも訪れ、当時の街の様子、景観を伝えていゝ。彼にとどまらず、当時の知識人は、動機（政治的亡命等）や目的はそれぞれ異なるが、実によく各地を遍歴している。

こうしてアレクサンドリアは、プトレマイオス王朝の首都として、とりわけ前三世紀にその繁栄をみることになる。パピルス、碑文、貨幣等の史料も、プトレマイオス一世の治世の末期から二世の初期に相当する時代から多く伝存している。例えば、妹のアルシノエと結婚したため「妹に愛された神」（フィラデルフォス）という異名を持つプトレマイオス二世（前二八五―二四六頃）の時代のアレクサンドリアで活躍した作家の一人に、ヘロンダスがいる。彼は、『取り持ち婆』という作品の中で、登場人物の一人が、主人がアレクサンドリアに出かけ、寂しさをかこっている若妻に、富、権力、体育場（パラエストラ）、よい天気、名誉、見せ物、学者、若人、兄弟神を祀った境内――後にクレオパトラ（七世）にもみられるように、プトレマイオス王朝においては、王は人格化され、姉もしくは妹と結婚するのが通例であった――、ムーセイオン、酒、美女、エジプト（アレクサンドリア）にはおよそこの世にあるもので欠けるものは何一つとしてない、と語りかけ、心配を煽っているが、これはこの都市の当時の殷賑ぶりを表していると言える。

また、この市と「ヘフタスタデイオン」という堤防でつながれたファロス島の東端には、巨大な鏡で光を反射する高さ一六〇メートルとも一八〇メートルともいわれる大燈台があり、世界の七不思議の一つに数えられていた（古代において「七」は聖数であった。「七不思議」というように、その数

を「七」に限定するのはその一つの表れである。何を七不思議のうちに数えるかは時代や地域により異なるが、メンフィスのピラミッド、バビロンの女王セミラミスの空中庭園、エペソスのアルテミス神殿、オリンピアのゼウス神殿、ロドスの巨像、ハリカルナッソスにあるカリアの王マウソロスの廟が代表的な例である）。燈台は、英語では〈Pharos〉、ドイツ語では〈Pharus〉、フランス語では〈phare〉と呼ばれるが、その語源がファロス島、ひいてはそこにあつたと伝えられる燈台に求められることは言うまでもない。ファロス島の燈台は、古代においては燈台の代名詞だったのである。

しかし奇妙なことに、現在のアレクサンドリアの地図をみると、「ファロス島」なるものは存在していない。古代と現代のアレクサンドリアの二葉の地図を比較すると、およそ地形が変わつてしまつており、結論的に言えば、古代都市アレクサンドリアは、水面下に沈んでしまつていたのである。古代都市の主要な建物が海岸線に沿つて建てられており、波により侵食され、陥没したことも理由の一つであるが、この地帯は古代から大地震とそれに伴う津波におそわれることが多かった。記録に残つていられるだけでも三六五年、四五六年、一三〇三年に大きな被害を被つていられる。紀元後五世紀には多くの教会史家が出てくるが、その一人コンスタンティノープルのソズメノスは、三六五年の大津波について、皇帝ユリアヌスが当時国教となつていたキリスト教を廃し、ギリシア伝来の多神教を再興しようとしたため神の怒りを買つたのだと言つていられる。また有名なクレオパトラ七世の死をきっかけに、エジプトはローマの属領となり、さらに七世紀（六四一年）にはアラブにより占拠されてしまふ。実際、現在のアレクサンドリアは、エジプトの公用語がアラビア語であるため、「エル・イスカンダリア」とアラビア語で呼ばれるように、アラブ都市なのである。度重なる天災や内乱、外的の侵入（二六九年にはパルミラの女王ゼノビアにより一時的に占拠される）で、古代都市アレクサンドリアの外見は無くなつてしまつた。つまり、その意味で「古代都市アレクサンドリア」は謎の都市なので

ある。しかも、そこに展開した「ムーセイオン」を中心とする学問研究活動は、例えばわれわれが今日ホメロスを読みうることが示すように、現代においても脈々と続いていると言えるが、しかし、「ムーセイオン」ひいてはそこにあつたとされる大図書館も、その実体となるとやはり謎に包まれているのである。

*本稿は、近々刊行を予定しているアレクサンドリアに関する著作の一部であることを付記しておく。